様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１０３３

研究課題名（和文）専門職(教員・医師)養成におけるサービス・ラーニングの教育効果に関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical Research of the Educational Effectiveness Regarding Service-Learning on Professional (Teachers & Doctors) Education

研究代表者
倉本　哲男（Kuramoto, Tetsuo）

愛知教育大学・教育実践研究科・教授

研究者番号：３０４０４１１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、大学教育での「専門職(教員・医師)養成におけるサービス・ラーニングの教育効果に関する実証研究」である。その研究目的は、協働でこれまで取り組んできた専門職養成系（教員養成・医師養成）の大学教育において、第一に、ＳＬカリキュラム開発と実践化を、更に推進するための理論的構築を図ることにあった。第二に、学生への教育効果として挙げられる次頁の研究課題を質的・量的なマルチメソッドによって実証した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to provide a venue for the use of Medical English learned. This will be done through analyzing the effectiveness of Service-Learning at the medical education. Service-Learning combines the subject's content (English Communication) and social needs (medical care for underserved people) for active study to give practical meaning to student's learning.

研究分野：教育学

キーワード：専門職(教員・医師)養成　サービス・ラーニング

１．研究開始当初の背景

1990 年代のアメリカの教育改革から、新たなカリキュラム開発（Curriculum Development）が法制化をともなって普及し始めた。地域（コミュニティー）における市民性（Citizenship）を育成することを目標論に据え、アカデミックな教科内容・スキルと他者に対するコミュニティー貢献活動とを統合することによって、学校改善を促進させる新たなカリキュラムの開発・経営論が Service-Learning（以下、SL）である。

また、SL とは、教科内容の習得とその学習過程において培う問題解決能力や意志決定等の学習能力を、サービス活動を中心に据え教科内容の基礎基本との関連を図りながら伸長する統合カリキュラム(Integrated Curriculum)・教育方法論である。SL はアメリカの「生活と教育」という伝統的文脈から生起したもので、一つはアメリカ社会のボランタリズム(奉仕主義)からのものであり、他の一つが「経験としての教育」（Education-as-Experience）の教育哲学に起因する。SL は K-12（幼稚園レベルから 12 年生まで）と高等教育レベルに適用されているが、本研究では特に我が国の高等教育レベルに焦点化した。

２．研究の目的

（１）上述の動向に加えて、我が国の高等教育レベルでは、近年の専門職（教員・医師など）養成改革の動向において、その基軸の一つに実務・実践能力を高めることが重視されている。しかし、大学教育においては未だに静的な「座学」が中心であり、多くの学生が「学ぶ意義」を感得できずに、その学習意欲の低下が指摘され続け、改善の方途は不十分である。その方策の一つとして、本研究では専門職養成系において SL を導入し、学生の体験的学習に関する実践的研究を推進する。

（２）日本でもＳＬは、ボランティア教育の一環として徐々に認知され始め、幾つかの大学教育レベルで採用され始めている。（上智大学・関西国際大学・他）但し、純粋なボランティア教育が「社会貢献」「自尊感情」に有効であるのは明らかであるが、研究上の残余部分として強調すべきは、ＳＬの最大の特徴が「専門教科の学び」と「社会貢献活動」との統合性にあることである。以上のような学術的背景(研究的残余部分)を踏まえ、代表者は、博士論文（教育学）「アメリカのカリキュラムマネジメントの研究 －Service-Learning の視点から－」を出版している。更に、これに研究分担者 Christine Kuramoto(医師養成系)が加わり、医学教育学の知見も研究方法の一つとして援用していった。

３．研究の方法

（１）SL の概念規定に関する考察

まず、SL の定義についての考察をする。

「児童・生徒が生きること（living）と学習（learning）との間の連関（connection）をつかむ学習過程（プロセス）において、成人になるとはどういうことなのか、自由で礼節をわきまえた市民（citizen）として生きていくことはどういうことなのか、また、真に慈悲深く（compassionate）、他者への思いやり（caring）のある生き方をするということはどういうことなのかを理解する学習方法ないしはその過程である。」

つまり、SL とは、意義ある社会貢献活動と知的学習を結びつけるカリキュラム開発の方法論であり、コミュニティーサービスの体験は知識や技術を感得しながら、コミュニティーの課題に直面し、その改善に向けての参加機会を与えるものとなる。また、そのサービス体験を体系的にリフレクションに取り組む過程で、更に生徒の学習や人格成長が促されることが期待できるカリキュラム・授業論と理解できる。

（２）SLの理論的背景　- 伝統的授業・社会構成主義的授業とSL授業との比較から -

社会構成主義者で著名なバンクス(Banks)は、その立場から以下のように市民教育(Citizenship Education)を推進する３要素をあげている(。

①知識の獲得と管理　②参加経験、意志決定の能力開発　③価値観や態度の健全なる向上

つまりこれらの事柄は、知識的・概念的なものよりもむしろ参加意志決定の能力、更には価値観や態度の向上に重点をおこうという市民的資質の育成を意図している。民主主義等の概念や理想は、それだけでは「生徒の育ち」にとっ

て無意味であり、現実に社会的参加をして理念を実践していこうとする態度を持った「知的社会行為者」を育成することに市民教育固有の目標があるとする。

一方でSLの理論的背景は、上記のような市民教育論に依拠しながらも、経験主義教育も思想背景として直接経験・反省的思考・批判的思考等が学習の鍵とされている。実際にコミュニティーにサービスをすることを通して社会的参加・社会的貢献をし、学習者がコミュニティーの変革を感得できることに大きな特徴がある。SLの本質観は主として次の三点に整理できよう。第一に、SLを通して個人の自己価値観や能力のみではなく、コミュニティーに対する価値観としての市民性に着目できる。第二に、省察(Reflection)を教科学習過程に位置付け、サービス体験したことを教科内容に統合化するカリキュラム開発によって、経験主義的な学習成果をより期待できることである。第三には、SLは知的能力の開発を促進するという点である。その知的能力は、判断力・表現力・洞察力・問題解決能力等の獲得に重点がある。

更に本研究では、SLカリキュラム開発論の特徴を概括する意味で、全米レベルのSL実践を体系化したことで著名なキンスリー(Kinsley)による伝統的授業・社会構成主義的授業とSL授業カリキュラムとの比較検討論を、筆者がカリキュラムPDCA(Plan・Do・Check・Action)の各段階別の視点から修正的検討を加え、これを再整理した。

つまり、SLとは、デユーイらに代表される経験主義的学習論の見地から、真の意味で知的・人格的発達が個人とコミュニティーとの切実な相互関係で成立する学習論である。SLの提唱者らは、知識とはあくまでも道具にすぎず、人間の経験において有用とみなされた場合にのみ、その知識は価値を持つといった「道具主義」の立場をとっている。有用的知識を刺激しない抽象的な学習は、生徒にとって「学ぶ意味」を感じることにならないという立場から、SLは伝統的授業形態・知識注入主義に対するアンチテーゼでもある。

４．研究成果

（１）カリキュラムの開発と実践の概要

26 年度に開発したＳＬモデルカリキュラム(Plan)を実施し(Do)、学生に対する教育効果を検証・評価した（Check)。特にその際の留意点は、平成 26 年度に開発したカリキュラムの 3 要素に重点をおくが、一方では、国内外の他大学のＳＬ実践の情報を収集し、我々が開発・推進してきたＳＬ実践との相違点、専門教科の Needs との統合の観点を明らかにした上で SL カリキュラムを開発した。また、具体的には、医学部生をニカラグア(Nicaragua)に引率し、医学英語と熱帯医療（教科）について再学習するタイプの SL 実践を実施した。

SL カリキュラムは、①学術②学生③社会ニーズの 3 要素を満たしている。

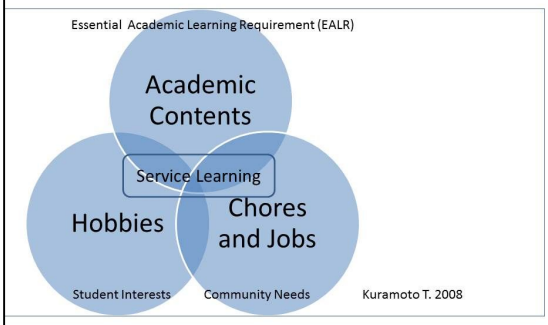

図 1. 専門職育成の SL カリキュラム開発

写真１. なぜ、ニカラグア SL が必要か？

（2）教育効果　-Text Mining による実証-

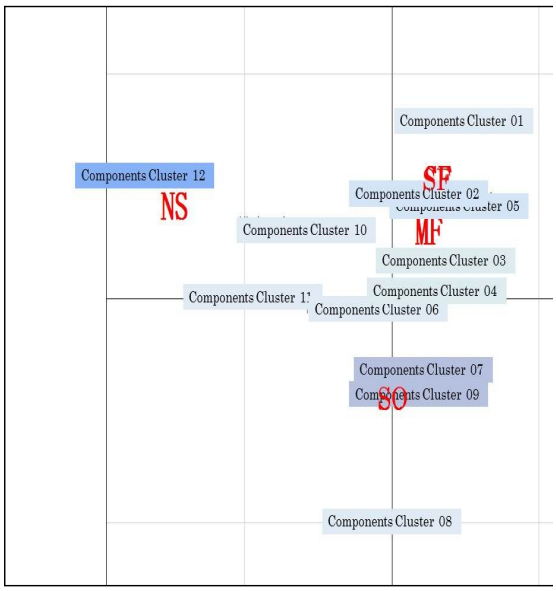

図 2.学生の感想の分散（Text-Mining）

- After this trip, I got to know that ability to get physical findings is much more crucial than ability to read results of examinations (X-ray photographs and ECGs) .
- At first, I did not know what I should do because of my poor ability to listen to English. After watching other volunteers working, however, I could understand what I should do.
- I worked with Tanya who saw patients. I wrote prescriptions in Spanish following examples which she had written before.
- So, I wished I had learned how to get physical findings in addition to knowledge of parasitology and dermatology before the trip.”

（学生の医学英語のため，原文のまま引用）

以上の分析から，本研究においては3点について論じることができる。

第一に、学術的特色としては、米国を中心に発展してきたＳＬは、我国の大学教育においても徐々に浸透し、ＧＰに採択された事例等が散見される。しかし、一般には大学生のボランティア推進としての特色が強く、教師養成・医師養成等の明確な専門職養成に直結したＳＬ実践は、未だ少ないと言えよう。本研究では、ニカラグアSLが典型的だが、我国のＳＬ実践を明確な教員・医師の専門職養成に特化し、その専門教科の教育目標とカリキュラム内容・方法を統合することに大きな特徴があった。

第二に、研究上の独創性として、大学教育においては未だに「静的な座学」が中心であり、多くの学生が「学ぶ意義」を感得できず、専門的な実務能力の育成は不十分であろう。その教育的方策の一つとして、専門職養成系にＳＬを導入し、教員、及び医師を目指す各学生に体験重視の教育的展開を施したと言えよう。各専門教科で学んだ知識・スキルを活かして社会貢献(サービス活動)をし、構成的なリフレクションを通して、自己の人間的成長を実感し、教科の有効性を再認識する等の教育効果を実証することに独創性があった。

（本研究の中心的方法論はText-miningであった。）

第三に、本研究の成果と意義として、まずは、教員・医師等の専門職養成系の学生にとって動的な学習の自覚化を促すことが挙げられる。座学が多い大学教育の中で如何に内発的学習動機を高め、実感を伴う将来のキャリアビジョンにつなげるかが、重要な教育的課題ではある。そこで、専門職養成系の担当者にとっても、教科内容を前提としたSLの体験性と振り返りが、「反省的実践家」(Reflective Practitioner)の視点から、体験学習の意義を再認識することになると言えよう。これに加え、本研究の波及効果として，大学全体の他学部・大学院においても様々なSL実践が生み出され、能動的な学習への転換が図られる可能性を期待できる。

ＳＬによって学生が社会貢献意識を培い、自

尊感情を高めることが一定程度、検証できたことにより、高等教育における学生のボランティアリズムを推進することが可能と考察できる。これに加え、本研究で対象とする教員養成・医師養成の範疇を超えた大学教育全体においても、体験学習の望ましい姿の一端を描くことに、成功したものと総括できよう。

<引用文献>

Kuramoto, C. (2002). Improving motivation in oral communication classrooms in Japan: an action research project. English Language Teacher Education and Development, 6, 45-67.

Kuramoto, C.; Kuramoto T. (2006). Service-Learning in Japan: Environmental Recovery from Minamata Disease. Journal of the Faculty of Culture and Education Saga University, Vol. 10, pp. 211-221.

Kuramoto, C. (2007). Using Authentic Texts in the Language Classroom. Journal of Educational Practice of the Faculty of Culture and Education Saga University. Vol. 23, pp.123-139.

Kuramoto, T. (2008). (PhD Dissertation) The curriculum management of Service-Learning in the USA, Fukuro publication company, Japan.

５．主な発表論文等「（雑誌論文）（計 3 件）」

① Tetsuo Kuramoto, (2015) "Development of Teacher Education in the Global Era –focusing on Ed.D. and Master programs for In-Service Teachers-", The 10th East Asian International Symposium on Teacher Education symposium, Official Conference Proceedings, pp.1-10.（査読なし）

② Christine Kuramoto & Tetsuo Kuramoto, (2015) "International Service-Learning in Nicaragua", Journal of Medical English Education, The Japan Society for Medical English Education (JASMEE),Vol.14, No3, pp.99-102.（査読有）

③ Chiristine Kuramoto, & Tetsuo Kuramoto, (2014) International Service-Learning in Nicaragua, NACE Official Conference Proceedings Vol.1 (ISSN 2819 1087) pp.180-190. （査読有）

６．研究組織

（１）研究代表者

倉本　哲男（KURAMOTO　Tetsuo）
愛知教育大学　教育実践研究科・教授
研究者番号 30404114

（２）研究分担者

倉本 Christine (KURAMOTO Christine)
浜松医科大学　医学部　准教授
研究者番号　20510126